勝福寺寺報

ひびき

第103号

2022年4月1日

南無阿弥陀仏 ～人と生まれたことの意味をたずねていこう～

3.11 忘れなの鐘

午後2時　読経・焼香

2時46分　鐘を撞く

遠く通ずるに、四海の内みな兄弟なり

あの3・11、東日本大震災から11年が過ぎた。今年はロシアによるウクライナ侵攻の報道が流れ、あの大津波後のガレキの風景とウクライナ爆撃の光景とが重なって見えました。そしてウクライナの原子力発電所が狙われたことに驚き、戦禍は他人事（ひとごと）でないと感じました。

原発が爆破されれば、ヒロシマ・ナガサキ以上の大惨事になると思う。福島原発事故が起きて、日本に54基もの原発があると知った。人間に制御できないものを生み出して、欲望を満たすことを善として生きている人間の罪業の深さ、そして愚かさ。

日本は戦後76年、平和を享受してきました。これは容易ではないことです。多くの戦争体験者の悲願が憲法九条となり、私達にブレーキをかけてくれているからです。今私は映像によって、戦争の残虐さ恐ろしさ不条理を目の当たりにしています。爆音と火炎、流される血と涙、破壊され、変わり果てた故国の姿。これからどうなるのだろう。国外に避難した家族達は再会出来るのか、失った生活を取り戻すことができるのだろうか。

今、人類は結束して国々に平和と自由を与え合わねばならないと思う。そのために私達は出来るかぎりの辛抱や援助をして、この世界苦を乗り越えねばならない。同時代に生きる運命共同体の一人としての生き方を学びたいと思っている。

＊　＊　＊

すべての者は暴力に怯（おび）える。すべての生きものにとって生命は愛（いと）しい。己（おの）が身（み）にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。

実にこの世においては、およそ怨（うら）みに報いるに怨みをもってせば、遂に怨みの息（やす）むことは無い。怨みを捨ててこそ息む。これは永遠の真理である。

『法句経（ほっくきょう）』（真理の言葉）

発行：真宗大谷派響流山勝福寺　〒879-0471 宇佐市四日市1426 TEL 0978-32-1806　ホームページ;kouruzan-shoufukuji.com

報恩講法話　（一月二十三日）

親鸞聖人と聖徳太子

藤谷知道

聖徳太子千四百回御遠忌

昨年は聖徳太子の千四百回忌でした。法隆寺をはじめ四天王寺などで盛大に御遠忌が勤められたと聞いております。

ところで、親鸞聖人は聖徳太子を「父のごとく」「母のごとく」と慕い、その恩徳を感謝しています。それで、浄土真宗のお寺には、父君の用明天皇の病気平癒を祈願した「孝養図」（太子16歳）がまつられています。はたして、親鸞聖人にとって聖徳太子はどんな存在だったのでしょうか。

救世観音の化身

親鸞聖人は聖徳太子和讃を合計二〇五首も造られました。（『皇太子聖徳奉讃』など）それによると、親鸞聖人にとって聖徳太子は、仏法の精神にたってこの世を救う「救世観音菩薩」の化身であります。

太子は、蘇我や物部など有力豪族の恣意のまかり通る「倭国」を、隋のような法に基づく「和国」へ変えていくことに生涯をかけられました。それで親鸞聖人は太子のことを「和国の教主」と仰がれたのでした。

推古天皇の摂政

聖徳太子は用明天皇と穴穂部間人皇女（あなほべのはしひとのひめみこ）の間に生まれました。祖父は仏教をはじめて受容した欽明天皇です。

（「孝養図」勝福寺・右余間）

欽明天皇なき後、第二王子の敏達天皇が跡を継ぎます。敏達天皇なきあと弟の用明天皇が継ぎますが、天然痘のため二年でなくなりました。その後を継いだ弟の崇峻天皇は、蘇我馬子の手によって暗殺されました。

天皇の後継争いが激化する中で窮余の策として浮かんできたのが、馬子の姪であり敏達天皇の后であった額田部皇女（ぬかたべのひめみこ）を天皇にするという案でした。こうして日本で初めての女帝が生まれたのです。この推古天皇を摂政として補佐したのが聖徳太子です。

和をもって貴しとす

聖徳太子は推古天皇の摂政として、豪族の恣意を排した公明な政治理念として仏教や儒教を取り入れました。その象徴が「十七条の憲法」です。

その第一条は「和をもって貴しとす」です。蘇我氏や王子たちが繰り広げてきた私利私欲の争いを超えたいという願いによって憲法が作られたからでしょう。

今も世界中で争いが絶えません。国連憲章も有名無実化し、力が支配する世界になろうとしています。なぜ「（平）和」が実現しないのか。「和」は単なる妥協では実現しません。自己を超えたものへの帰依があってはじめて成り立つのです。だから太子は第二条で「篤く三宝を敬え。三宝とは仏・法・僧なり」と仰られました。

共に是れ凡夫ならくのみ

自己のエゴを押し通す時でも、人間は必ず「義（正義）」を立てます。「我に義あり」です。ソ連も中共もアメリカもナチスも日本帝国も、おしなべて「我に義あり」と言って、自己のエゴを他国に押しつけました。

だから太子は、第十条において「人皆心有り。心おのおの執れること有り。彼是すれば我は非す。我是すれば彼は非す。我必ず聖に非ず。彼必ず愚かに非ず。共に是れ凡夫ならくのみ」と述べられました。「共に是れ凡夫」という自覚は「帰依三宝」からもたらされ、この自覚だけが「妥協」でない真の「和」を実現する原理であります。

日本の原点

『日本書紀』は聖徳太子を公明正大な政治を行った理想の政治家として描き出しており、日本社会が混迷を深めたとき、立ち帰るべき原点として聖徳太子が日本人の心に刻み込まれていきました。

戦後育ちの私たちには、聖徳太子は一万円札の顔として親しんできました。それは、明治維新の行き着くところが軍国主義であった反省から、日本再生の原点を求めて、聖徳太子の再発見があったからではないでしょうか。

末法の世

それと同じようなことが親鸞聖人の時代にもあったのです。聖人がお生まれになった平安末期は奈良・平安と続いてきた律令体制が崩壊し、藤原摂関家と、天皇を退位した上皇による院政と、南都北嶺の巨大寺院と、新たに台頭した源平の武士勢力によって国家が虫食われ、民衆は飢饉や天災に押しつぶされていました。

親鸞聖人は、この末法の世を救うものとして聖徳太子を憶念するようになられたと思います。それは親鸞聖人の個人的なことでなく、うち続く戦乱によって苦しんでいた民衆の願いでもあったのでした。

（続く）

ご門徒さん こんにちは！ 第二十三回

親の教えが染みこんでいます

渡辺昌敏・榮子（四日市）

今回は勝福寺の近くで「こうじ屋さん」と呼ばれて皆さんに親しまれている渡辺昌敏さん榮子さんご夫婦をお訪ねしました。

母の力

昌敏さんは昭和21年生まれの75歳、四日市の上町で、3人兄姉の末っ子として生まれました。

父親の信雄さんは軍隊で結核を患ったため病弱で、田んぼなどは母親のミツルさんが小さかった昌敏さんを背中に背負いながらこうじ屋の仕事も同時にこなして家庭を支えていました。

転　機

昌敏さんの性格は、榮子さんによると、「キチンと筋を通す性格で納得するまでは動かない。とても頑固だ」そうです。

そんな昌敏さんは高校を卒業すると国鉄に就職しました。助役等幹部登用試験に合格し鉄道管理局で経理幹部審査官として勤務していましたが、国鉄が民営化でJRになる時、22年間勤めた国鉄を退職し、防衛庁事務官に転職しました。

将来を嘱望されていた昌敏さんは周りの人からJRに残るように勧められたそうですが、当時、父親の体調が芳しくなく、近くで勤務できる職場を探していたら、防衛庁事務官の職がありました。昌敏さんはたくさんの応募者の中から選ばれ採用されました。昌敏さん40歳の時でした。

出会い

奥さんの榮子さんは昌敏さんより5歳年下の70歳です。生まれは京都郡勝山町、現在のみやこ町です。3人姉妹の二女で、性格は誰からも好かれる明るさと負けん気が強く、手際が良い頑張り屋さんです。

高校を卒業すると国鉄の駅構内にある売店キョスクに勤めることになりました。

当時の国鉄は、とても家族的な職場で山登りやボーリングなどグループ交際が活発でした。その仲間のなかでも榮子さんは誰からも好かれ、明るさがひときわ目立っていたそうです。

昌敏さんは結婚するなら家の中が明るくなるような性格の女性だと考えていたそうです。まさにピッタリですね。二人は昌敏さん27歳、榮子さんが22歳の時に結婚し3人の子どもにめぐまれました。

そして自衛隊築城基地に転職したのを機に実家の四日市に戻ってきました。その頃、義母のミツルさんは体調がすぐれず、榮子さんが田んぼから家業の麹づくりまで義母さんに教わりながら、持ち前の負けん気と手際の良さでこなしていきました。

特　技

昌敏さんは航空自衛隊沖縄基地の群厚生班長として定年の60歳まで19年間勤務しました。

ご夫婦が四日市に戻って34年経ちます。戻った当時小6の長女、小5の次女はそれぞれ結婚して大分市に住んでいます。その娘姉妹から「結婚するときはお母さんが縫ったドレスが着たい」と懇願され、忙しい合間にドレスを縫い上げ、娘姉妹に結婚式で着せることが出来たそうです。

そんな親の背中を見て育った娘さん達からある時、「お母さんがいろんなこと教えてくれたから今の自分がある。今度は自分がそれを活かして子供に教える番。本当に良かった」と嬉しい言葉をもらったそうです。

そして小2の長男は41歳になり、5年前にこうじ屋の仕事を継ぐためにサラリーマンを辞めて帰ってきました。こうじ屋さん四代目の誕生です。

昌敏さんは退職後、市報で知った木工教室に通ったのがきっかけで《面打ち》などをするようになり、腕前は素人離れしています。その作品の一つが昌敏さんが彫った勝福寺本堂の階段上がり口の柱にかかっている左の表札です。

家　業

麹の仕事は、早朝から夜中と管理が大変で手が抜けません。しかも麹は生き物なので布団でゆっくり寝ることも出来ず、炬燵で仮眠を取っている状態だそうです。

そんな手塩にかけた自慢の味噌は宇佐市のブランド商品に認証され、宇佐市内外のたくさんのお店で扱われています。

でも、忙しくてなかなか時間がとれないとのこと。大変なお仕事ですね。

そんな忙しい二人の楽しみは、大分市など各地で開催される骨董市に行ってそれぞれが好きな品物をさがすことだそうです。「この時だけは気が合う」と笑いながら話してくれました。

思　い

最後に勝福寺に対しての思いを尋ねると「勝福寺は隣近所の関係とは違い、お寺様の言うことは阿弥陀様の心、という親からの教えが体に染みこんでいます。信仰と言うより親戚みたいなものです」と答えてくれました。

昌敏さんは父親の信雄さん同様、字がとても達筆です。勝福寺の宛名書きなどを長く勤めてくれて親子共々随分お寺のために尽くしてくれました。

こういうご門徒さんに支えられて勝福寺は成り立っているんですね。どうぞ体に気をつけられていつまでもお元気で。

（文責　渡辺 重昭）

参加者募集！

親鸞聖人関東御旧跡巡り

西念寺　山門

親鸞聖人は42歳頃より20年間、茨城県笠間市稲田の草庵（現・西念寺）に居を構え、関東一円に出向いて、人々にお念仏の教えを説いてまわられました。

江戸時代になると、聖人のご苦労を偲び、ゆかりのお寺を訪ねる「二十四輩巡り」が盛んになりました。

私たちも「いつかは」と思ってきましたが、ようやく御旧跡巡りを思い立ちました。

皆さんのご参加を心よりお待ちしています。

募集要項

【日時】十一月一日～四日
【巡拝予定】
報恩寺（性信開基・板東本）
西念寺（稲田草庵跡）
玉日廟（伝・恵信尼公の墓）
大覚寺（山伏弁円・明法開基）
報仏寺（唯円開基）
専修寺（真仏開基・高田派本山）
信願寺（唯信開基・聖人銅像）
願入寺（如信上人開基）
＊ほかに水戸偕楽園等見学予定
【費用】十万円（予定）
【同行】川島弘之先生
【交通手段】飛行機・バス
【募集人員】20名
【申し込み〆切】8月31日

専修寺

生活の中の仏教用語　縁起（えんぎ）　第4回

「あっ、茶柱が立ってる。縁起がいいなあ」「仏滅に結婚式とは縁起が悪い」「勝福寺の縁起は江戸時代にさかのぼる」、このように「縁起」という言葉は歴史的にもいろいろな意味合いで使われてきました。

「縁起」の原語は、インドの言葉で、物事がさまざまな事柄、はたらきを「縁」として共に関係し合いながら「起」こっている事実を意味します。例えば、種をまいても水や太陽の光を縁としなくては芽は生じません。

釈尊はこの縁起に目覚めた方で、「縁起を見るものは法を見る」、縁起とはすべての衆生が目覚めなくてはならない大切な法（道理）であるとご説法くださっておられます。

私たちは日頃、自分と周りとの関係を切り離して、自分を実体視し固定的に受け止めています。しかし、縁起は、すべては関係としてあるという事実を語る道理ですので、その道理が知らされる時、実体的な考えは根拠なきものとなります。

人生は自分の勝手な解釈にはまるものではなく、本来私たちの思いを超えて限りなく広くて深く、そして豊かなのです。

『暮らしのなかの仏教語』（大江憲成著）から一部を引用させていただきました。

第三十一回響流（こうる）句会　（二〇二二年一月七日）

山道の木漏（こも）れ日掬（すく）ふ初乗車　小若女弘子
春雪やチェホフ読みて一日暮れ　響　八朗
一人居（い）の窓辺ほのぼの初あかり　佐藤麗子
越前の潮風運ぶ初荷かな　藤谷純子
一人逝きまた一人逝（ゆ）き年暮るる　藤谷知道
初髪の茶の湯芳（かんば）し背伸（せな）ばす　本多加代子
去年今年（こぞことし）がめ煮の味のほっこりと　吉武康子

ウクライナ支援カンパ

3・11忘れなの鐘の集いで集まったウクライナへの人道支援カンパ一六六，〇〇〇円を赤十字を通してお送りしました。これからもよろしくお願いします。

編集後記

昨年末にはコロナ感染が落ち着き、今年こそは例年通り報恩講を勤めることができると喜んでいたところ、一月に入るや突然のオミクロン株による感染拡大で、昨年に続き一日だけの報恩講となりました。

御法話は富山の太田浩史先生にお願いしていましたが、来年に延期してもらい、かわって住職が「親鸞聖人と聖徳太子」の課題を頂き、学ぶところをお話しさせていただきました。その概略を今号と次号と二回にわたって載せさせて頂きます。（知道）

今回は四代にわたって麹屋を受け継いでいる渡辺さんをお訪ねしました。勝福寺のご門徒で家業を受け継いでいる家は数軒しかないそうです。その家は代々、熱心なご門徒だと伺っています。やはり親の背中を見て子どもは育っているんですね。（重昭）